

この文書の内容の初出は 2010 年の
日本教育社会学会第 62 回大会における公開シンポジウム

「子どもの性」を考える

—多様化する情報・消費社会のなかで—

での報告要旨として

配布パンフレットに掲載されたものです

この文書は、佐倉ジェンダー研究所w e bのコンテンツの一部となっています。

<http://homepage3.nifty.com/tomorine3908/mermaid.top.htm>

(「桜色の虹は社会学の夢を見るか」のコーナー)

<http://homepage3.nifty.com/tomorine3908/SociologyCbRw.top.htm>

佐倉智美

Copyright Tomomi Sakura since 1998.

性的マイノリティが学校で直面する問題

—当事者の語りの中の学生時代から—

佐倉智美 (ジェンダー&セクシュアリティライター)

学校における性的マイノリティとは？

性的マイノリティとは大まかには「同性愛」「トランスジェンダー」「インターセックス」という3つの系統がある。いずれも一般社会が措定した性別をめぐる「常識」——二元的性別観や異性愛主義に立脚したもの——にそぐわないために、少数者としてさまざまな問題に遭遇することを余儀なくされる存在である。

学校は社会全体と無関係に独立しているわけではないので、学校における性的マイノリティをめぐる諸問題も、いわば社会の縮図であり、学校を離れた性的マイノリティのそれと、共通するところは少なくない。

しかし一方では、学校に固有な要素も考えられなくはない。

- ◆性的マイノリティ当事者が若く未熟、そして保護者の監督下にある
- ◆小学生以下だと、自らの状態を周囲に説明するだけの言語化が難しい場合も
- ◆中学以降だと、ただでさえか性にまつわる葛藤の多い思春期にかかる
- ◆性的マイノリティのための各種法令等の整備は、主として成人が対象
- ◆狭く限られた学校文化の範囲内では社会一般の状況が、より濃縮され典型的に反映する可能性も

容易に想起されることだけでも、以上のようなものが挙がり、やはり学校にフォーカスした性的マイノリティの実状把握は、教育問題として緊切したテーマであると言えるだろう。

学校時代の性的マイノリティに起こりうる事例

例えばM t F トランスジェンダー当事者でもある報告者自身の学校時代について、以下のようなことが振り返られる。(佐倉, 2002, 2003)

- ◆男子集団になじめない。諸々の"感性"の違い。居心地の悪さ。いじめも。
- ◆女子との友情を渴望しても男子として異性であるために叶えられない

◆制服、校則、その他において"男子基準"が適用されることへの違和感

◆男子生徒としての役割期待に上手く応えられないことによる周囲との摩擦や自己肯定感の低下

もともと、これらの時代背景はインターネットなどで各種情報がまがりなりにも得られたりする昨今とは状況が必ずしも同一ではない。このあたりを補う、最近の事例も見てみる必要があるだろう。

若手性的マイノリティの語りの中に見る学校時代

そこで、2009年から2010年にかけて制作された2枚のDVDに着目した。『LGBTインタビュー』『高校生向け人権講座・セクシュアルマイノリティ入門』と題されたもので、関西を代表する当事者グループ「Gフロント関西」や「QWRC」の協力の下に実施された、有志によるインタビューの様子が収録されている。

その中で語られる内容から、学校に関係ある箇所に注目したところ、前述したようなものとも重なる点が多い、さまざまな発言が抽出された。それらは大きく分けて3系統の内容に整理できた。

1系統目は、性的マイノリティであることが直接的に不自由をもたらしている事象に触れたものであった。周囲が性的マイノリティを否定的に取り扱うことで、いじめを含む、学校社会からの疎外が発生しているのである。

(「周りの女の子が、恋愛で盛り上がりはじめて、そんな時、あ、ついて行かれへんって思って。好きな男の子を捏造して合わせてた」など)

2系統目は、広く学校文化全般に組み込まれた、いわゆる"隠れたカリキュラム"が立脚する二元的性別観や異性愛主義が、性的マイノリティのありようと適合しないために、さまざまな局面がストレスフルになることを訴えるものであった。"隠れたカリキュラム"への取り組みには、性的マイノリティの視点も必要だろう。

(「ランドセルから、体操服から、習字道具入れとか。もう何から何まで赤と黒、そういうカチッて決まってるのがすごい嫌でしたね」など)

3系統目には、今後の学校のありかたや教職員の姿勢に対する期待・要望が並んだ。言い換えれば、現時点の学校は、まだまだ性的マイノリティの存在を念頭に置いておらず、教職員の意識の中でも、二元的性別観と異性愛主義が強くあることの表れなのだろう。

(「日々の授業の中で、そういう多様性を認めるようなことを子ども達に伝え…」など)

その他の学校性的マイノリティ事例補足

2002年における[G I D親子会]のアンケート(土肥, 2004)でも近似した声が得られている。

- ◆ (受験・入学の段階から) 書類で、やたらと「性別」の欄が多い
- ◆ (体育の実技、殊にプールは) しない。着替えがいや (健康診断なども)
- ◆ (保健の授業) 自分 (インターセックス) には生理も射精もない…
- ◆ (宿泊行事には) 行きたくない。皆といっしょに風呂に入れない。
- ◆ (相談した教師からは) あくまで隠し通すよう指導された。解決ではない

また、毎日新聞で2010年6月に掲載された連載「境界を生きる」でも、思春期のトランスジェンダーの自殺未遂などの深刻な事例が紹介されているほか、学校に望みの性別で通学できるように要望したところ「前例がない」を根拠に難渋されるケースの多さが示唆されている。

(「毎日.jp」<http://mainichi.jp/life/housing/news/20100613ddm001100169000c.html> ほか, 2010.6.30)

しかし昨今の情勢変化の方向性が、全体的には当事者にとって良い方向を向いていることもあって、幸いにも理解ある周囲の協力によって希望の性別での学校生活を実現させるトランスジェンダーの事例は散見されるようになっている。各種の課題は残るものの、これらのケースでは、名前の通称使用、制服・校則の柔軟化、更衣室やトイレ等の運用の工夫、体育実技をレポートで代える、などの対応が実施されているようである。

学校性的マイノリティの背景にあるもの

学校には今もなお多くの"隠れたカリキュラム"と呼べる要素が残っていて(木村・天野, 2003

など)、これらが性的マイノリティと学校現場との、さまざまなコンフリクトの源のひとつになっているのは、上述したとおりである。

また、"隠れたカリキュラム"は単純に性別二元的・異性愛主義的ではなく、むしろ男子優先の原理の具現なので、これはヘゲモニックな男性性が称揚される中での「パワー・プレイ」に満ちた男子社会(多賀, 2006)に置かれる男性同性愛やMtFトランスジェンダー生徒にとって特に深刻な危機をもたらす(佐倉, 2006)とも言えるだろう。

そうした現場においては、個別の児童・生徒・学生への対処は、現実にはケースバイケースで、眼前の問題を順番にひとつひとつ共同で取り除いていくしかないのだが、その際にも、二元的性別観や異性愛主義が社会秩序であり、また社会体制となっており、社会構造の大前提として私たちの生活の隅々にまで張り巡らされている(江原, 2001)ということ、前提としてふまえておくことは——例えばトイレ・更衣室や公文書が絡むような問題に対応する際——大切だと思われる。

そのうえで、ひとりひとりが「性別は女か男かの2つ」「男女間の恋愛こそ正統」…ではないと理解することによる総体的な意識の変革が、長い目で見れば、社会におけるコミュニケーションのルールを変更し、社会構造の組み換えにもつながるはずである。

そして、このような考え方に基づいてのアプローチこそ、この問題を社会学が扱う意義なのではないだろうか。

◎参照文献

- 土肥いつき, 2004, 「学校のありかたに関するもうひとつの考え方」 日教組教研集会『両性の自立と平等分科会レポート集』
- 江原由美子, 2001, 『ジェンダー秩序』, 勁草書房
- 木村涼子・天野正子編, 2003, 『ジェンダーで学ぶ教育』, 世界思想社
- 佐倉智美, 2002, 『女が少年だったころ』, 作品社
- , 2003, 『女子高生になれなかった少年』, 青弓社
- , 2006, 『性同一性障害の社会学』, 現代書館
- 多賀太, 2006, 『男らしさの社会学』, 世界思想社